

第53回

さ や か
押絵と紗耶加人形展

2階収蔵品展



開催期間 1988年12月1日(木)～1989年2月26日(日)

開館時間 9時30分～16時30分

休館日 月曜日・祝日

入館料 大人100円・児童生徒50円

酒田市立資料館

酒田市一番町8-16 TEL (0234) 24-6544

開催にあたって

今回は、第4回目の館蔵品展として、表題の「押絵と紗耶加入形」を展示致しました。展示資料は、皆様からの寄贈品や当館での購入品を主体にし、一部拝借した資料を基に構成致しました。

過ぎ去りし昔をしのび、造形の心と美にふれていただければ幸いです。

開催にあたり、貴重な資料をご提供されました方々に厚くお礼申し上げます。



押絵

きれ裂でつくる絵

人物・花鳥・禽獣などを、部分ごとに厚紙で切り抜き、それぞれを色替りや模様替りの裂で包んだ上、貼りあわせてもとの形をつくる。厚紙を裂で包むときに間に綿を含ませてふくらみをつけるので、でき上がりの画面は浮き彫的な効果を出す。

押絵は江戸時代の上層婦人の手芸として流行し、これを額面に仕立て、あるいは箱の蓋につけることが行われ

たが、明治時代にはいつて次第に衰え、現在はその名残りを、羽子板にとどめる。なお、屏風の各扉とひらごとに絵替りの絵を貼りつける形式を押絵貼と呼んでいる。

(参考 岡田 譲『日本風俗史事典』より)

押絵の羽子板が見られるようになったのは、江戸中期の文化・文政時代のころからであるが、そのころは人物だけの押絵で、板全面に押絵が見られるようになったのは明治以降である。浅草の羽子板市は有名である。

(参考 山田徳兵衛著『新編日本人形史』)

